

Shakespeare の韻文における Inversion

—文要素の意味上の相対的軽重による分析—

原 田 文 三 郎

序

Inversion は韻文に於て極めて自由に用いられているので、此を支配する原則を見出すことは容易なことでない。W. Franz が、*Shakespeare-Grammatik* のなかで、Inversion を含む語順の問題全般について、「韻文の語順は韻律形使用の際の詩人の主観性が非常に大きな役割を演ずるので、散文の語順より自由にならざるを得ない¹⁾」と述べているのも当然なことのように思われる。然しながら、詩人の主観性が如何に大きな役割を演じようと、Shakespeare の韻文は本来劇場において聞かれる為²⁾に書かれ、またそれは詩人と聴衆とが共有する同一の文法的・音声学的言語体系を基調として書かれたものと考えらるなら、主観性には一定の限界が存在することは明らかである。此の事は逆に、現象的には恣意的に起るように見える Inversion の背後に、或る種の原則が働いていることを意味するであろう。もっとも、これは、語順に関しては複数の要因が錯綜して作用する故に、一つの原則で個々の事象をもれなく説明し得るというのではない。ただ、豊富な資料の比較研究より巨視的に眺めるなら、Inversion のメカニズムは「文頭要素」・「主語」・「定形動詞」の相互関係から生ずる意味上の相対的軽重、及び音声上の強弱に依存する所が最も大きいと思われる。小論はかかる見地より、統計的処理により考察しようと思う。資料として用いたのは研究社詳註シェイクスピア双書の *Mids.*, *Twelf.*, *Merch.*, *As.*, *1H4.*, *2H4.*, *R2.*, *Caes.*, *Hml.*, *H5.*, *A & C.*, *Mcb.*, *Oth.*, *Lr.*, *Tp.* の 15 篇である。

§ 1. 文頭要素の機能と転倒率

Inversion は主語以外の文要素で文が始まる時起こるが、正常の語順もまた見られる。此処では、双方の語順の対立がある Declarative sentence と Exclamatory sentence について考える³⁾。文頭要素の果す機能を基準とすれば、Inversion の全貌は次のようになる(表1)。

これより明らかになることは、(1) 7つの文頭要素は転倒率の高低によって、3つのグループ——1., 3.4., 3.1. (60~50%)…3.3 (49~40%)…3.5., 2., 3.2. (39~30%)——に分けられる。(2) 副詞(句)は、その意味の差異により、巾のある転倒率を示す。(3) 然し、副詞(句)を意味から下位区分せず一類として捉えれば、各文頭要素の示す転倒率の序列は Complement > Adverb (phrase) > Object の順となる。(4) これら文頭要素の示す転倒率の相互

- 1) フランツ著(斎藤静, 山口秀夫, 太田朗共訳)「シェイクスピアの英語」篠崎書林, § 681b.
- 2) cf. M. C. Bradbrook, 'Fifty years of the criticism of Shakespeare's Style: A Retrospect', *Shakespeare Survey* 7, p. 2.
- 3) Preparatory 'there' で始まる文は、Inversion と Normal order との対立が無いので、除外される。

表 1

			Normal order	Inverted order
Initial element	1.	Complement	93 (40.7%)	136 (59.3%)
	2.	Object	269 (65.7%)	141 (34.3%)
	3.	Adverb (phrase)	1039 (61.5%)	669 (38.5%)
Sub-division of Adverb (phrase)	3.1.	Place & Direction	199 (50.0%)	200 (50.0%)
	3.2.	Time & Frequency	245 (66.5%)	125 (33.5%)
	3.3.	Manner	129 (54.2%)	109 (45.8%)
	3.4.	Degree	31 (43.7%)	40 (56.3%)
	3.5.	Other	435 (69.1%)	195 (30.9%)
Total			1401 (59.7%)	946 (40.3%)

間の格差より、Complement が著しく高い転倒率を示すことがわかる。

表 1 の例

1. Complement :

S-V: A gallant knight *he was*, his name was Blunt; (*1H4.* 5.3.20)

V-S: O, what a rash and bloody deed *is this!* (*Hml.* 3.4.27)

2. Object :

S-V: Not Hermia but Helena *I love*: (*Mids.* 2.2.113)

V-S: The dearest ring in Venice *will I give you*, (*Merch.* 4.1.435)

3.1. Adverb (phrase) of Place and Direction:

S-V: And here *the smug and silver Trent shall run* (*1H4.* 3.1.102)

V-S: Where ne'er from France *arrived more happy men* (*H5.* 4.8.131)

3.2. Adverb (phrase) of Time and Frequency :

S-V: For but a month ago *I went* from hence, (*Twelf.* 1. 2.31)

V-S: Twice *did he turn his back and purposed so*; (*As.* 4. 3.128)

3.3. Adverb (phrase) of Manner :

S-V: On her dead mistress; tremblingly *she stood* (*A & C.* 5.2.346)

V-S: And, like Limander, *am I trusty still* (*Mids.* 5. 1.199)

3.4. Adverb (phrase) of Degree:

S-V: Seldom *he smiles*, and smiles in such a sort (*Caes.* 1.2.205)

V-S: No more *shall trenching war* channel her fields, (*2H4.* 1.1.7)

3.5. Other adverb (phrase):

S-V: Had been incorporate. So^d *we grew together*, (*Mids.* 3.2.208)

V-S: With a foul traitor's name *stuff I thy throat*; (*R2.* 1.1.44)

§ 2. 文頭要素の軽重と転倒率

Inversion は先行する要素との関連より、単に連結の役として用いられる所謂「接続副詞」(Conjunctive adverb) の後に起こる。

Too old, by heaven: let still the woman take

An elder than herself; *so* wears she to him, (*Twelf.* 2.4.30-1)

Most royal sir, /Fleance is 'scaped.

Then comes my fit again: I had else been perfect, (*Mcb.* 3.4.19-21) -

これらの接続副詞は、文脈間の関係を指示するに止まり、何ら明確な映像や概念を喚起するものではない。換言すれば、Lexical function を欠如し、Grammatical function を具備するだけである。故に此等は意味の上から「軽い」要素と見做されよう。これに反して、

For Banquo's issue have I filed my mind;

For them *the gracious Duncan* have I murder'd; (*Mcb.* 3.1.65-6)

に於ては、*For Banquo's issue* と *the gracious Duncan* は Grammatical function はもとより、Lexical function をも備えている。さらに強調の為に文頭要素となったのであるから、此の点でも前の場合から区別され、意味上「重い」と判断される。

Go you down that way towards the Capitol

This way will I: disrobe the images, (*Caes.* 1.1.68-9)

この例での *this way* は、先行する要素との関連から文頭に置かれたのであるが、Lexical function を果すという理由に基づいて、やはり「重い」要素として分類される。

That fashion'd others. And him O wondrous him!

O miracle of men! *him* did you leave, (*2HA.* 2.3.32-3)

此処での *him* は、先行要素との関連もさることながら、強調の為に、文頭を占めている。それは代名詞であるから、Grammatical function だけを有し、Lexical function を欠く意味上軽い要素であるけれども、強調の故に重い要素に帰属せしめられる。同じ理由で

Though their injunction be to bar my doors,

.....

Yet have I ventured to come seek you out, (*Lr.* 3.4.155-7)

に見られる *yet* は、*though*-clause と相関的 (Correlative) に用いられているので、重い要素と見做される。結局、文頭要素が Lexical function を有する場合は重い要素に分類され、たとえそれを欠如しても、文脈上強く意識される時、同一の分類がなされる。このように考えると、Inversion は文頭の要素について、二重の「層」(Strata) より構成されることが明らかとなる。

4) *so, then, yet* などの接続副詞 (Conjunctive adverb) をも副詞として取扱う。なお、大塚高信編「新英文法辞典」三省堂、pp.266-267 参照。

表 2

	Normal order	Inverted order	Total
Heavy initial element	1189 (57.9%)	866 (42.1%)	2055 (87.4%)
Light initial element	212 (72.6%)	80 (27.4%)	292 (12.6%)
Total	1401 (59.7%)	946 (40.3%)	

重い要素が、全体の文頭の要素のうち 87.4%、軽い要素が 12.6% を占めるので、前者は全体の約 9 割弱に達する。また、双方の下に起こる転倒率は、42.1% と 27.4% とであるから、Inversion 全体の転倒率——40.3% (表 1,2 参照)——と対比すれば、重い要素が Inversion 全体の方向をきめることはまぎれもない事実である。

§ 3. 主語と定形動詞の意味上の軽重

文頭要素については、Lexical function の有無と文脈の二点から検討したが、此処でも同一の尺度が適用されよう。主語と定形動詞のうち、いずれか一方が Lexical function を具備し、他方がこれを欠く軽重の明白な対比からなる組合せを、(1) 絶対的軽重と名付けるならば、明白な対比を欠くが、文脈もしくは動詞の性格より、自ずと意味上軽重の隔りを呈する組合せを、(2) 相対的軽重と呼ぶことが出来る。さて、Form-word は Grammatical function を具備するが、Lexical function が無く、Full-word は両方の機能を発揮する故に、上述の組合せを次のように表わすことが可能である。

(1) Form-word + Full-word → Light + Heavy

例 *So hallow'd and so gracious is the time.* (*Hml.* 1.1.164)

(2.1) Form-word + Form-word → Light + Heavy

例 *O, what a rogue and peasant slave am I!* (*Hml.* 2.2.576)

That bucket down and full of tears am I,

Drinking my griefs, whilst you mount up on high. (*R2.* 4.1.188-9)

cf. *Landlord of England art thou now, not king:* (*R2.* 2.1.113)

(2.2) Full-word + Full-word → Light + Heavy

例 *And down goes all before them. Still be kind* (*H5.* 3. Prol. 34)

And in my loyal bosom lies his power (*R2.* 2.3.98)

cf. *The bitter taste/Yield his engrossments*... (*2HA.* 5.79-80)

矢印の右側に、二つの要素間に生ずる意味上の軽重が示されている。(1) の場合、Lexical function の無と有との対立が軽重の差となって現われ、(2.1) では文脈より明白である。但し、参照の例では、*Landlord of England* と *king* とが対照されており、*art thou* は双方とも軽いと言わなければならない。(2.2) に於て主語と動詞を比較するなら、意味の重要度について、*all* は *goes* より、*his power* は *lies* にはるかに勝る。その理由は *down* と *in* (*my loyal bosom*) の中に、*goes* の表わす「動作」と、*lies* の示

表 3

		Normal order				Inverted order				Relative frequency as a whole
		s-v	s-V	S-V	S-v	v-s	V-s	V-S	v-S	
Heavy IE (+)		(-)(-)	(-)(+)	(+)(+)	(+)(-)	(-)(-)	(+)(-)	(+)(+)	(-)(+)	
1	Complement	69 (56.1%)	7 (77.8%)	3 (25.0%)	14 (15.5%)	54 (43.9%)	2 (22.2%)	9 (75.0%)	71 (84.5%)	136/229 (59.3%)
2	Object	107 (54.0%)	119 (83.3%)	19 (65.6%)	24 (60.0%)	91 (46.0%)	24 (16.7%)	10 (34.4%)	16 (40.0%)	141/410 (34.3%)
3	Adverb (phrase)	255 (47.1%)	322 (86.5%)	118 (53.9%)	132 (47.5%)	291 (52.9%)	51 (13.5%)	101 (46.1%)	146 (52.5%)	589/1416 (41.5%)
Total		431 (49.8%)	448 (85.6%)	140 (53.4%)	170 (42.5%)	436 (50.2%)	77 (14.4%)	120 (46.6%)	233 (57.5%)	866/2055 (42.1%)
		1189 (57.9%)				866 (42.1%)				

表 4

		Normal order				Inverted order			
		s-v	s-V	S-V	S-v	v-s	V-s	V-S	v-S
Light IE (-)		(-)(-)	(-)(+)	(+)(+)	(+)(-)	(-)(-)	(+)(-)	(+)(+)	(-)(+)
Conjunctive adverb		48 (51.5%)	73 (86.9%)	43 (93.5%)	48 (69.6%)	45 (48.5%)	11 (13.1%)	3 (6.5%)	21 (30.4%)
Total		212 (72.6%)				80 (27.4%)			

N.B. * IE は Initial sentence element を指す。

* 大文字の S, V は Full-word を, 小文字の s, v は Form-word を指す。

す「漠然たる存在」の意味が、すでに含まれているからである⁵⁾。前者にあっては、……you must [go] away to France (R2. 5. 1.54) の如く、場所方向を示す副詞 (句) の前で省略され、後者では殆ど意味内容の無い is に置換しても、文意に変化をもたらさないのが、何よりの証拠である⁶⁾。然し参照として掲げた例文では、動詞 yield は叙述構造の中核的役割を果す⁷⁾ 故に、意味上の重要度については、主語 engrossments と同等であって、双方とも重いと見做されるのである。

§4. 文要素の軽重と転倒率との関係

次に、文頭要素・主語・定形動詞の3つの文要素が織りなす意味上の軽重関係の型と、それぞれの型が示す転倒率との相関関係を検討する。便宜上、Auxiliary verb, Copula *be*, 及び Pronoun などの Form-word を (-) と、Noun, Verb などの Full-word を (+) と表わし、また、軽い文頭要素を (-), 重い文頭要素を (+) と表記するならば、軽重関係の型は、2種類の文頭要素について、それぞれ4つのタイプが生ずる(表3, 4)。

Heavy initial element :

- 5) 大塚高信著「英文法論考」研究社, p. 288 参照。
- 6) A. Western 著, 大塚高信訳「文のリズムと語の配置」研究社, p. 6。
- 7) 叙述構造は体言叙述 (Nominal predicate) と用言叙述 (Verbal predicate) とに分たれる。前者は、動詞の内容が多少稀薄化して、叙述の中心は動詞から述詞へ移動しており、後者は、叙述構造の中核が動詞に存する。従って、前者の動詞は重要度に於て軽く、後者では重いのが普通である。

(+)(-)(-), (+)(+)(-), (+)(+)(+), (+)(-)(+)

Light initial element :

(-)(-)(-), (-)(+)(-), (-)(+)(+), (-)(-)(+)

これらの頻度率は、その分布数と、それに対応す正常語順の型が示す分布数との割合から導かれる。これによって、既に表2で明確化された Inversion を形成する二重の層の内部構造が解明されることになる。

さて表3より次の事柄が明らかになる。

- (1) それぞれの文頭要素について、(+)(-)(+) もしくは、(+)(-)(-) が最も頻繁に起こる。
- (2) 逆に、いずれの文頭要素に関しても、(+)(+)(-) は最も低い頻度率を示すだけである。
- (3) 然し、(+)(+)(+) の頻度率は流動的であって、(+)(-)(+) と (+)(-)(-) の間、または、(+)(-)(+) と (+)(+)(-) の間での頻度率を示す。
- (4) 文頭要素が Complement のとき、(+)(+)(+) と (+)(-)(+) の頻度率は顕著に高い。他の文頭要素についてはそうは言えない。此が Complement 全体としての転倒率が、Object と Adverb (phrase) に対比して、異常に高い理由となっている。
- (5) 総計より、4つの軽重関係の型を頻度率の減少順に配列すれば、(+)(-)(+) > (+)(-)(-) > (+)(+)(+) > (+)(+)(-) となるが、此等のうち最高・最低の型は、そのまま、正常語順に於ける頻度率の最高・最低の型に一致する。

次に、表4より明らかになることは、

- (6) 4つの軽重関係の型は、それぞれの示す頻度率と、Inversion 全体としての平均転倒率との差異より、比較的高い頻度率を

示す (-)(-)(-) と (-)(-)(+), 比較的低い頻度率を示す (-)(+)(-) と (-)(+)(+), という二つのグループに分けられる。

(7) そして, それらの頻度率の減少する順序は当然のことながら, (-)(-)(-)>(-)(-)(+)>(-)(+)(-)>(-)(+)(+) と並べられるが, 表3の場合とは異なり, 頻度率の順序について正常語順が示す軽重関係の型との間に, 必然的關係は何ら見受けられない。

表3の例

(+)(-)(-):

Complement: S-V: How hard *it is* for women to keep counsel! (*Caes.* 2.4.9)

1. V-S: O spirit of love! how quick and fresh *art thou*, (*Twelf.* 1.1.9)

Object: S-V: These strong Egyptian fetters *I must* break, (*A & C.* 1.2.120)

2. V-S: A borrow'd title *hast thou* bought too dear. (*1H4.* 5.3.23)

Adv. (phr.) S-V: Even at that time *I may* be married too. (*Merch.* 3.2.196)

3. V-S: Against the blown rose *may they* stop their nose (*A & C.* 3.13.39)

(+)(+)(-):

Complement: S-V: Adding withal, how blest *this land would* be (*R2.* 4.1.18)

4. V-S: Mad *call I* it; for, to define true madness, (*Hml.* 2.2.93)

Object: S-V: Words, life and all, *old Lancaster hath* spent. (*R2.* 2.1.150)

5. V-S: The other part *reserved I* by consent, (*R2.* 1.1.128)

Adv. (phr.) S-V: Now *all the youth of England* are on fire (*H5.* 2.Prol.1.)

6. V-S: More *needs she* the divine than the physician (*Mcb.* 5.1.82)

(+)(+)(+):

Complement: S-V: ...and second father/*This lady* makes him to me. (*Tp.* 5.1.195-6)

7. V-S: The uglier *seem the clouds* that in it fly. (*R2.* 1.1.42)

Object: S-V: Not Amurath *an Amurath* succeeds, (*2H4.* 5.2.48)

8. V-S: So swift a pace *hath thought* that even now (*H5.* Prol. 15)

Adv. (phr.): S-V: So well *thy words* become thee as thy wounds; (*Mcb.* 1.2.43)

9. V-S: Now *thrive the armourers*, and honour's thought (*H5.* 2. Prol. 3)

(+)(-)(+):

Complement: S-V: My boon *I make* it, that you know not (*Lr.* 4.7.10)

10. V-S: Bad *is the trade* that must play fool

to sorrow, (*Lr.* 4.1.40)

Object: S-V: The labour *we delight* in physics pain. (*Mcb.* 2.3.55)

11. V-S: What thriftless sighs *shall poor Olivia* breathe! (*Twelf.* 2.2.40)

Adv. (phr.) S-V: Thus most invectively *he pierceth* through (*As.* 2.1.58)

12. V-S: And never *did the Cyclops' hammers* fall (*Hml.* 2.2.511)

表4の例

(-)(-)(-): S-V: It will not speak; then *I will* follow it. (*Hml.* 1.4.63)

13. V-S: Then *would I* have his Harry, and he mine. (*1H4.* 1.1.90)

(-)(+)(-): S-V: Thus *ornament is* but the guiled shore (*Merch.* 3.2.97)

14. V-S: Deny us for our good; so *find we* profit (*A & C.* 2.1.7)

(-)(+)(+): S-V: And so *your follies* fight against yourself. (*R2.* 3.2.182)

15. V-S: Quite vanquish'd him: then *burst his* mighty heart; (*Caes.* 3.2.190)

(-)(-)(+): S-V: And now I'll do it. And so *he goes* to heaven (*Hml.* 3.3.74)

16. V-S: So *is Alcides* beaten by his page; (*Merch.* 2.1.35)

§5. 表3と表4の解釈

既に前節に於て, 表3. と表4より読み取れる意味上の軽重関係の型とそれが示す頻度率との関係を, 7つの項目にわたり列挙したが, 次に, 此等の内容を如可に説明するかが問題となる。さて, 文要素の意味の軽重は, 文に流れる我々の「意識に於ける明瞭度の強弱⁹⁾」換言すれば, 「文のリズム」(Sentence-rhythm)⁹⁾の形成に参与する。一般に, 文のリズムは文の前位 (Front position) と, 後位 (End-position) とが意味上重要であるから強く, 中位 (Mid-position) はこれらに比較して重要性が少いから弱くなり, しかも, その途中の弱い部分にも「強弱」の律動的要素が働くから, それは

最強 弱 強 最強

と図示することが出来る¹⁰⁾。これが文中に流れる典型的 Sentence-rhythm のパターンであるならば, Inversion とて, このパターンを保持せんとする傾向を示すのは当然であろう。このように考えると, 重い文頭素 (表3) の場合, 意味上の軽重関係の型がどの程度にこのパターンに適合し得るかという点が, それぞれの頻度率との関係を解く決め手になるように思われる。然し, 軽い文頭素 (表4) の場合, すべての軽重関係の型がそのパターンに反

8) 大塚高信著「英文法演義」研究社, pp. 122-126.

9) 意味のリズムとも呼ばれる。音声的・物理的 rhythm に対して, 意味の重要性を基準とした意味的・心理的 rhythm を指す。(市河三喜編「英語学辞典」研究社, pp. 884-885 参照)

10) 大塚高信編「新英文法辞典」三省堂, p.1000.

するので、他の基準、つまりそれぞれの型の差違が浮彫にされる Verse-rhythm が、決め手として適当と思われる。

5.1. Sentence-rhythm による分析 (表 3 の場合)

それぞれの軽重関係の型が生みだす文のリズムを矢印の右側に示せば、次のようになる。括弧の中の番号は表 3 の例文の通し番号である。

A. (+) (-) (-) → — ~ — (1) or — ~ — (2,3)

Ö spirit of love! how quick and fresh art thou. (1)

A borrow'd title hast thou bought too dear. (2)

ここで、文頭要素 how quick and fresh と A borrow'd title とは、一個の意味単位として機能するから、概略一つの強と見做し得る。最初の例における thou は、相対的軽重の原理 (§3.2.1.) より、強となる。後の例では、強として働く bought を従えるから、hast thou は 1 個の弱となる。一般に、文のリズムでは Dactyl や Anapaest のような型はなく、強と弱とが互に交替する型のみが存在するからである。いずれにせよ、「強弱強」もしくは「強弱」のリズムになり、Sentence-rhythm のパターンに適合し得るのである。

B. (+) (+) (-) → — — ~ (4, 5, 6)

The other part reserved I by consent (5)

特に I が強調されるのでなければ、「強強弱」のリズムとなるで、一般的には先のパターンに適合し得ない¹¹⁾。

C. (+) (+) (+) → — ~ — (7,8) or — — — (9)

The uglier seem the clouds that in it fly. (7)

Now thrive the armourers, and honour's thought. (9)

第 1 の例で、seem は相対的軽重の原理 (§3.2.2.) より弱となり、その前と後は強となるので、Sentence-rhythm のパターンに合致する。然し、第 2 例で、thrive は叙述構造の中核的役割を担い、軽い要素となり得ないからリズムの上から強となる。その上、その前・後の語も強となるので、パターンに符合し得ない。ただ、厳密に言えば、最強となる Now よりも、thrive は多少弱くなるので、Sentence-rhythm のパターンに全く符合し得ないと言いつても、直前の例の場合と対比すれば、相対的な意味で、「不適合」と見做し得るであろう。従って、(+)(+)(+) はパターンに合致し得るものと、合致し得ないものと 2 種類のリズムを描くと言えらる。以上の点からわかるように、異なるリズムは、動詞の性格にかかっている。即ち、動詞の果す役割が、叙述構造に於て主役か脇役か、または、動詞を省略したり、意味のない be 動詞に置換しても文意に変化を来さないかどうか (§3.2.2. 参照) などの点に依存している。従って、概括的に言えば、C-V-S はたいていパターンに一致し得る¹²⁾、O-V-S は「特定のもの」¹³⁾

を除き、合致し得ないのが普通であり、Adv. (phr.)-V-S は両者の中間的性格を帯びることになる¹⁴⁾。

D. (+) (-) (+) → — ~ — (10, 11, 12)

Bad is the trade that must play fool to sorrow. (10)

此処では、常に Sentence-rhythm のパターンに一致する。

以上の考察から明らかなように、4 つの軽重関係の型は、Sentence-rhythm のパターンへの適応度より、完全に一致し得る (+) (-) (-), (+) (-) (+), 一致と不一致との場合のある (+) (+) (+), 一致し得ない (+) (+) (-) の 3 つのグループに分けられるであろう。ただし、注目すべきは第 1 のグループに認められる適応度の微妙な差異である。(+) (-) (-) の例文 1 のように、主語で文が完結するとき、主語が文脈上強調されて始めて、相対的軽重の原理 (§3.2.1.) によりパターンへの適応性を獲得する。一方 (+) (-) (+) は、例文 10 の如く、特定の条件に拘束されることなく、絶対的軽重の原則から常に適応性を備えている。従って、(+)(-)(+) は (+)(-)(-) より、Sentence-rhythm パターンへの適合性について、いくらかの優越性を保持している。そこで、先に言及した 3 つのグループが備えた適合性という観点から、表 3 で看取した (1)~(5) の事項は次のように説明出来よう。

(1) 軽重関係の 4 つの型のうち、(+)(-)(-) もしくは (+) (-) (+) が最も高い頻度率を示すので、Sentence-rhythm のパターンに合致するタイプは、転倒が起り易い。

(2) 逆に、(+)(+)(-) の頻度率が最も低いから、Sentence-rhythm のパターンに背反するタイプは転倒は起きにくい。

(3) (+)(+)(+) は動詞の性格によって、Sentence-rhythm のパターンに一致するもの程、頻度率は高まり、逆に不一致の割合が高いもの程、頻度率は低くなる。文頭要素の機能が変れば、それに応じて動詞の性格も変る。従って、それぞれの文頭要素について、その頻度率が占める順位も流動的にならざるを得ない。

(4) 文頭要素が Complement のとき、(+)(+)(+) はすべて Sentence-rhythm のパターンに一致するので、その頻度は著しく高まり、また (+)(-)(+) は Phrasal verb 型式¹⁵⁾ばかりでなく、Simple verb 型の転倒語順の場合も、そのパターンに合致する点に、高い頻度率の理由が見出される。

(5) 総計から得られる (+)(-)(+) > (+)(-)(-) > (+)(+) (+) > (+)(+)(-) という頻度率の減少順の配列は Sentence-rhythm のパターンへの適合度が低下する順序に対応している。このうち、最高と最低の頻度率を示す (+)(-)(+) と (+)(+)

voort によれば、此等の動詞に結合される目的語は、その重要度に於て動詞にまさり、動詞の意味が比較的希薄化した two-nucleus type の文になる (A Handbook of English Grammar, 582, 583, 586)。換言すれば Nominal predicate の文に接近するので Sentence-rhythm のパターンに一致する。例として、takes (R2. 1.2.74), have (1H4. 2.3.66, 4.1.7-8, Mids. 5.1.18) がある。

11) 文頭要素・動詞・主語のうち、動詞 reserved は本来重い要素であるから、軽い要素である主語 I が特に強調されて重い要素とならない限り、上述の三要素は「強・弱・強」のリズムとはならない。

12) C-V-S の叙述構造は Nominal predicate にぞくするからである。ほかの例として、proves (Mids. 3.2.350), looks (2H4. 1.1.62), appear (H5. 3. prol. 16) などがある。

13) 特定のものとは have, take などの動詞である。Zand-

14) Sentence-rhythm のパターンに一致するものに、live (Mids. 2.1.13), dwell (Merch. 2.6.25), stay (Merch. 4.1.107), come (Oth. 1.2.54), run (Caes. 3.2.178) などがある。なお、A. Western 著 大塚高信訳「文のリズムと語の配置」研究社、p.9. 参照。

15) 例えば A ministering angel shall my sister be, (Hml. 5.1.264) のように助動詞を用いる型式である。

(一)とは、正常語順の場合もまさしく同一の順序を呈するが、これは語順の差異とかかわりなく、基調として作用する原則が、Sentence-rhythm という普遍的原理であることを暗示するように思われる。

視点を変えて、文頭要素の機能の別から見た頻度率と、それらの減少順の序列は、表3よりわかるように、Complement (59.3%) > Adv. (phr.) (41.5%) > Object (34.3%) となるが、各々の内部構成は4つの軽重関係の型に占められているのであるから、究極的にはやはり、Sentence-rhythm のパターンへの適応度によって決定されると考えて差支えないであろう。

5.2. Verse-rhythm による分析 (表4の場合)

軽い文頭要素となる接続副詞は、先行部分の意味の段落の後に、単独で用いられたり、and, but, or などの純然たる接続詞を伴って用いられりする。こうした場合、接続副詞に与えられる韻律上の特徴は、単独に用られるとき、(1) Pause-accent¹⁶⁾ が働くわけであるが、それが Stressed syllable となって顕現化するのは一般に Form-word が後続する環境に於てであり、また、Unstressed syllable として抑制されるのは Full-word を従える環境に於てである。

V=Form-word:

Then must I think you would not have it so. (Caes.1.2.81)

The like do you: so shall we pass along (As.1.3.115)

cf. Then you shall be his surety. Give him this (Merch. 5.1.254)

V=Full-word:

Quite vanquish'd him: then burst his mighty heart; (Caes. 3.2.190)

So sways she level in her husband's heart: (Twelf. 2.4.32)

cf. Then fate o'er-rules, that, one man holding troth. (Mids. 3.2.92)

つぎに接続詞を伴うばあい、(2)接続副詞は詩脚内の第2 Syllable に位置して、Stressed syllable が置れるのが普通である。

Or else were this a savage spectacle: (Caes. 3. 1. 223)

It shall do well: but yet do I believe (Hml. 3. 1. 184)

cf. Or else our spell is marr'd. (Tp. 4.1.125)

このように考えると、比較的相対的頻度の高いグループである (-)(-)(-) と (-)(-)(+) とは、(1)の環境では Pause-accent を顕現化し、接続副詞を含む詩脚は、therefore のような2 Syllable の接続副詞は別として、Trochee となるのが一般的である。また、(2)の環境では、接続副詞に後続する詩脚に、Trochee の介入が避けられる。然し、比較的相対的頻度の低いグループである (-)(+)(-) と (-)(+)(+) は、(1)の環境では、Pause-accent を抑制して Iambus の詩脚を形成するのが普通であり、また、(2)の環境では、Trochee の詩脚となる可能性を生ずる。このような韻律上の差異が、§4. (6) で述べた双方のグルー

プ間にみられる頻度率の格差を招来すると思われる。何故ならば、Pause-accent の前には必ず Pause が存在するわけだが、その Pause は Unaccented syllable を一つ置いたのと同じ働をするので¹⁷⁾、Pause-accent を顕現化するのが、リズムの性格上、歓迎されると思われるし、また、Trochee は Pause-accent を含む詩脚を除き、他の詩脚では起こらないのが普通だからである¹⁸⁾。言うまでもなく、前者のグループは、こうした条件を満たしているが、後者では常に満足させるとは限らない。

次に、前者のグループ内における差異を検討しよう。主語と動詞とに与えられる韻律を、(-)(-)(-)、(-)(-)(+) について比較すると、前者は3通りのリズムの様式が可能である。

V-S: Then would I have his Harry and he mine: (1H4. 1.1.90)

V-S: It shall do well: but yet do I believe (Hml 3.1.184)

V-S: And therefore will he wipe his tables clean (2H4. 4.1.201)

文頭要素が詩脚内で占める位置について、最初の例の如く第1 Syllable に置かれても、また、第3番目の例のように第1 Syllable で終わっても、前述した2つのリズム条件を満たし得る。また、第2番目の例のように、第2 Syllable を占める場合も同様であって、極めて柔軟性に富むことを示している。これに反して、(-)(-)(+) は、Pause-accent を含む詩脚は別として、他の詩脚に Trochee の介入を回避するのに、若干の条件が附随する。例えば、

(1) S=Monosyllabic noun preceded by no article:

Grant that and then is death a benefit: (Caes:3.1.103)

cf. And therefore is Love said to be a child (Mids.1.1.238)

この場合、文頭要素は詩脚内の第2 Syllable に位置することが必要である。そうでないと、参照例の第3詩脚 (Love said) の如く Trochee となる。また 主語に続く Syllable は Unstressed syllable となり得る Form-word に、もしくは、第1 Syllable が Unstressed syllable となり得る Full-word に見出される必要がある。

(2) S=Monosyllabic noun preceded by an article or its equivalent:

So Should my thought be sever'd from my griefs, (Lr. 4.6.289)

And therefore must his choice be circumscribed (Hml. 1.3.22)

cf. Therefore my age is as a lusty winter, (As. 2.3.52)

文頭要素は詩脚の第1 Syllable を占めるか、または、そこで終わっている必要がある。主語に後続する Syllable については、上述の(1)と同様な制約を受ける。

(3) S=Dissyllabic noun with the accent on its first syllable preceded by an article or its equivalent:

So do our vulgar drench their peasant limbs (H5.4.7.80)

16) E. A. Abbott, *A Shakespearean Grammar*, Senjo-Shoten, p. 328.

17) 市河三喜「英文法研究」研究社, p. 233.

18) 大塚高信「シェクスピア手帖」研究社, p. 43.

^x And ^uthere ^xis ^uwing'd ^xCupid ^upainted ^xblind
 (Mids. 1.1.235)

主語に後続する Syllable については、Stressed syllable となる必要があるが、それは勿論 Full-word に見出されるのが普通である。然し、韻律の要請から、Form-word も Stressed syllable となり得るので、(1)・(2) の場合の如く 厳密な制約を受けない。然し、文頭要素については、上述の (2) の如く、詩脚の第 1 Syllable を占めるか、またはそこで終るといった条件が満たされなければならない。以上述べた点を総合すると、(-)(-)(+) が不自然な韻律となるのを避ける為には、次の 4 点について適切な環境がととのえられるべきである。(イ) 文頭要素が占める詩脚内での位置、(ロ) 主語に伴う冠詞(相当語)の有無、(ハ) 主語の有する Syllable の数、および、そのアクセントの位置¹⁹⁾、(ニ) 主語に後続する語が有する Iambus への適合性。然し、(-)(-)(-) についていえば、(ロ)・(ハ)は考慮される必要はなく、(イ)は、主語・動詞が既に見た如く 3 種のリズム型式が可能であるから、制約する条件とはならない。ただ、(ニ)のみが問題となる。従って拘束される条件が少ない方ほど、相対的頻度率は高まるといえる。同様なことが、(-)(+)(-) と (-)(+)(+) との相対的頻度率の差異についても言える。則ち、両者は共に、(イ)・(ニ)の 2 点が適切な環境におかれるべきである点で、殆ど変りはないが、(ロ)・(ハ)については、(-)(+)(+) にのみ関係する条件である²⁰⁾。従って、

19) アクセントの位置が可変的な語は別として、So is Alcides beaten by his page (Merch. 2. 1. 35) における Alcides [ælsáidi:z] のように、一種類のアクセントが見出される語の場合についてである。

20) 例えば Then comes my fit again: I had else been perfect. (Mcb. 3. 4. 21) に於て、冠詞相当語の my がいないと仮定するなら、fit again のように第 2 詩脚は Trochee となってリズムを破壊する。この意味で(ロ)・(ハ)という主語の構造にかんする条件が制約要素となる。しかし、(-)(+)(-) の場合、既に (-)(-)(-) の場合で見えてきたように主語は韻律の必要に応じて弱勢とも強勢ともなりうるので、制約要素とはならない。

より制約の少ない (-)(+)(-) が、(-)(+)(+) より高い相対頻度率を示すのは自然である。

これまで述べた事柄より、§4. (7) で眺めた (-)(-)(-) > (-)(-)(+) > (-)(+)(-) > (-)(+)(+) という序列は、まず、Pause を伴う文頭要素と動詞の韻律が $\underline{u} \times$ (強弱) を保持し得る度合と、次に、Pause-accent を含まぬ詩脚内で、Trochee を回避し得る度合との高い順序に配置されていると考えられる。

結 論

Inversion の頻度率は文頭要素の果す機能の差異によって、3 段階に分かれる(表 1)。これは要するに、文頭要素・主語・定形動詞という 3 つの文要素によって形成される意味上の相対的軽重の型が、結合様式の差異にもとずいて、それぞれ異なる頻度率を示すこと(表 3, 4)に起因している。さて、軽重 2 種の文頭要素の別が Inversion の頻度率を大きく 2 分する(表 2)ことは、それぞれの文頭要素のもとに起る Inversion の頻度率を左右する原理が違っていることを暗示する。これまでの分析により、文頭要素の重い場合は Sentence-rhythm に支配され (§5.5.1.)、軽い場合は Verse-rhythm に支配され (§5.5.2.) ことが明白である。即ち前者は——(—) (強弱(強)) という意味上のリズムを、後者は $\underline{u} \times \times$ (強弱弱) または $\underline{u} \times \underline{u}$ (強弱強) という音声上のリズムを保持しようとする傾向を示す。言うまでもなく、Inversion は此等のリズム型に調和すればする程頻度率は高まり、その逆ならば低下することがわかる。

ところで、重い文頭要素は全体の文頭要素のうち、約 9 割弱の 87.4% という高い比率を占める(表 2)のであるから、巨視的に眺めれば、Inversion 全体の傾向は Sentence-rhythm の原理に支配され、その頻度率は Sentence-rhythm のパターンへの調和度によって決定されるといえるし、また文頭要素の機能別による頻度率も究極的には同一の原理に左右されると言うことが出来るのである。